流離譚（新潮連載第六、七回 昭和五十一年八、九月号）

第六、七回）

流離譚の第六回は、井口村で起こった事件について記載しています。この第六回から単行本「流離譚」発行に当たり大きな改定が見られます。

例えば、

「　前に私は本家の平八が死んだ頃から、・・・」**の文章が削除され**

「　前に私は、寺田寅彦も著作のなかに井口村事件に関するものが見当たらないこと、そして、これは寅彦が事件を知らなかったためでなく、話が悲惨過ぎて書くになれなかったのだろうといふことを述べた。・・・」**に改定されています。**

＊井口村事件　上士が下士に切られた事件。その結果事件に直接関係ない宇賀喜久馬が切腹させられ兄利正が介錯。兄は後の寺田寅彦の父。

二人の歳は若く伝っていると、流離譚に次の記述があります。

・・寺田家の戸籍によれば利正はこのとき十六歳ではなくて二十五歳なのである。これなら立派に介錯人のつとまる年齢であろう。では、なぜ十九歳を十三歳、二十五歳を十六歳とするやうな誤りを生じたのか。・・井口村事件は芝居に仕組まれ、美少年宇賀喜久馬の悲運は子女の紅涙をしぼつたといふことだ。・・・

章太郎の祖父又彦の母は利正の姉で、利正とお下とは親しかったようです。又彦が明治二十三年東京に行くとき、名古屋に赴任していた利正に会いに行きますが、利正は熊本に転任していたので会っていません。次がその時の又彦のメモ記録です。

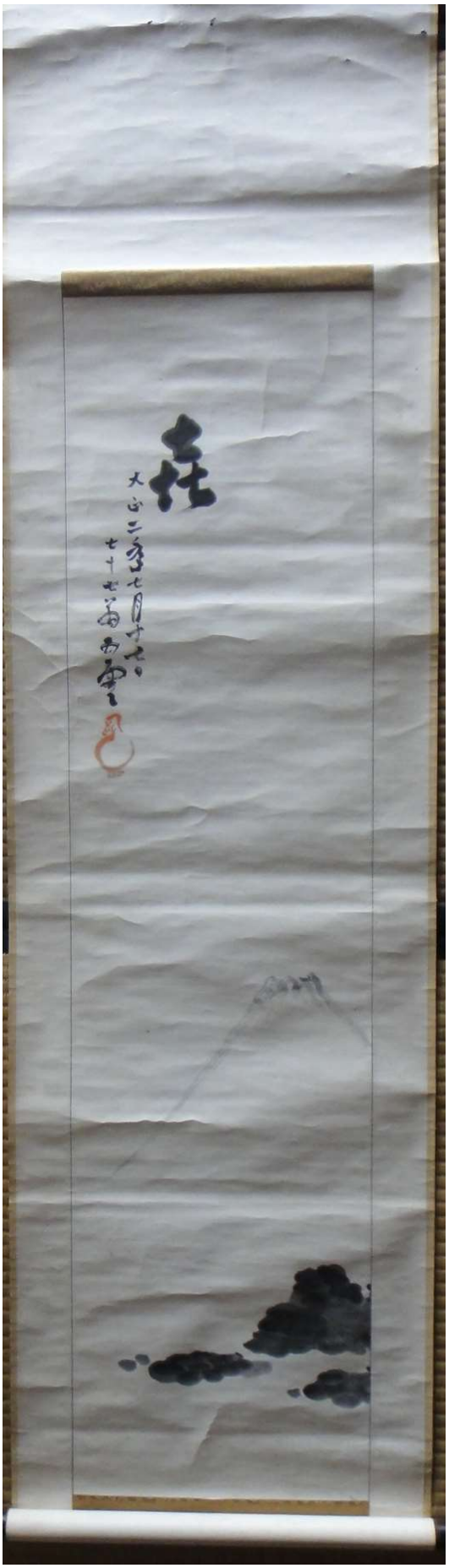
汽車ニ乗シ大阪出発
仝午后六時三十分名古屋着
旅宿名古屋市木挽町
川村方ニ宿　其夜□ガ
湘與午后十二時頃帰宿
就寝床
翌朝早起中ノ町井出正章
氏ヲ訪フ不遇正章氏ハ
名古屋鎮臺會計監警
ニシテ余カ伯父寺田(*利正)氏ト即テタ
役ニシテ挌分別想ニ□ニ□ハ

依ンデ□ヲ伯父ニ
従ヒ熊本鎮臺ニ至ル

左軸は喜寿の寺田利正が大正二年七月十七日(七が重なり喜に通じる)に書いて貰うと「幸」があると縁故者に配られものです。その時のことを秀彦は日記に次のように書いています。

七月十七日　木曜　曇

本日夜ハ非常ニ蒸せ暑イニたまらん夕方散歩シニｘつたら公園大下正調高ノ別役の伯母さんニ会つた今日ハ寿四乃御老人処七十七方乃七月乃十七日ニて今日喜の字を書いてもらつたら非常ニ幸奈りとの事で四方より注文があり早や伊野辺伯母さんの指図ニて一枚自分のものも書いて下されてゐるも□事あせかもよしと其足で直ぐ寺田へ行き御禮を述へ且つ御馳走ニ□上あつて帰る別役へ□□□□してもらう事とせり



このようなことを思い付く利正は弟を介錯した悲惨な過去と違った面をあるように思います。

金婚式の写真は親類から写真ファイルを貰い受け掲載しています。寺田寅彦が利正の左後にいます。

自画像写真などを近況報告で送っていましたので、この写真も山北に送られてきたものと思います。

寺田利正　自画像
S.IMAI.
KOCHI.
高知市本町
榮井会

寺田利正氏夫妻金婚式記念撮影（明治41年1月）　〔伊野部重一郎氏提供〕

井口村事件の後、流離譚は薫的神社の記載が続き、そこから山内家城主の移り変わりそして吉田東洋が登場します。長宗我部の菩提寺であった瑞応寺が廃仏毀釈で薫的神社に変わったように流離譚に書かれています。先日、薫的神社に行ったら共存するように瑞応寺は残っていました。

文助は家系圖に当主毎に生没年、妻の家ことなどを二、三行にまとめています。平八正久の項は生没年以外も書かれ二十行を越えています。文助は曽祖父平八正久の日記を手に入れていましたので、そこに平八正久の父覚兵衛正元の後妻の輿入れ道具及び瑞応寺への寄附などが書かれていたようで、家系圖の平八正久の項に書き写しています。

輿入れ道具は他にもあったと思いますが、鍔二枚のみ取り上げられています。一枚は媒に渡し、もう一枚の鍔は「スカシ舞鶴」で安岡の家に渡されたとあります。

瑞応寺への寄附については不明点が多いです。瑞応寺は深尾家の菩提寺のようで、輿入れ道具の鍔から、深尾家は長曽我部に仕えたそれなりの家格だったのでしょう。安岡の家も夜須で長曽我部に仕えていましたので、その頃、深尾家にお世話になっていた可能性はあります。

家系圖によると安岡の家から瑞応寺への寄附が始まったのは享保二十年です。買請けた田を祠堂田とし、吉米七斗五升五合を岡芝と四坊で毎年寄附していたとあります。覚兵衛正元が四坊で独立したのは寄附が始まってから五十年後の明和八年ですので、岡芝（本家）だけで寄附しその後、四坊が参加したのか、覚兵衛正元以前に四坊に誰かが住んでいて、その人が寄附していたのか。瑞応寺への寄附が始まる一年前の享保十九年に覚兵衛正治が亡くなっています。安岡覚兵衛正治の墓及び後妻の墓はともに有岡山にあり、四坊山の女性の古い墓に見られる「ｘｘ妻」でなく戒名が刻まれ台座に平八正久母とあります。何か寄附の開始を解く鍵があるように思います。先妻の墓は岡芝にあり戒名と覚兵衛の名刻まれています。お下では場所は不明ですが、正月に「深尾の神様」にお供えをしていたそうです。瑞応寺への寄附の名残でしょうか。

四千年六月鶉戸家地異發別宅發ス寛延二己巳
二月二日卒行年六拾四歳墓地有岡山ニ有是則
利隨太家ノ祖也後弥十郎代ニ前田ト亦移住
九兵衛　明和二乙酉八月十日卒老亀平家祖
弥九郎　享保十八癸丑六月六日卒茂奮祖
女子　早世享保十九甲寅年九月七日行年九歳
正久　安岡平八　後桐乃氏ノ騎其士味何某女
初平五郎ト稱

郷士初代覺兵衛四男初實兄佐五右衛門養育之
寶暦二年申歳津田純ニ至後七郎兵衛改役
知買請新規郷士ニ蒙出天明元辛丑年十二月
十三日卒享年七拾九歳墓地四方山ニ有覺兵衛
仰榮信士母八深尾氏ノ來ル深尾横ニ進ニ無子而
松下源太左衛門二男助ニ亟ト云人ヲ養子助ニ亟ト亦無
子而桑山氏ノ養子是亦不幸而家督慎中ニ病

家系圖　平八正久の項１／２

死家絶ル右桑山家ヲ養子ニ来シ人ニ妻後ニ伊藤氏
媒ヲ以覚兵衛之後妻来ル平八生仍ニ深尾家道具
何角持条ニ由其中ニ肥後鍔二枚由来書有之
右助之丞兄中沢助九郎ト唱肥後公ニ仕或時助九郎ニ
為對面御國ニ来シ時鍔二枚土産ニ持条右平八母
右鍔持来二枚ニ内一枚ハ後ニ伊藤寺ニ為ニ出シ
由一枚於今所持スカシ舞鶴杖亦深尾傳之ニ至

知源了通信士為菩提施主寿寧院深尾撰之進
後家為祠堂田瑞應寺ニ寄附山北村本田六反
代来ル右ニ享保廿年卯月山北村四郎助ヲ買得
故寄附於今吉田五年五月ツヽ同芝四坊安家ヲ年ニ
二枚水損ヲ以ニ吉田五年一井瑞應寺ニ持条初平八
或平五郎ト唱後平八ト革母故觀妙讃信女寶暦
三年癸酉正月十日行年八十一歳而卒ス墓地有岡山有

家系圖　平八正久の項２／２